
SSC ~ School Support Club ~

master

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SSC～School Support Club～

【ノード】

N7277M

【作者名】

master

【あらすじ】

成沢 春樹は生徒支援部（SSC）の一員。

SSCは日々学園の生徒からの相談を受け続けている為、伝統的に部員に好意を抱く人も少なくない。

春樹はある事情により恋愛御法度であるが、ある条件を満たす事が出来れば恋愛する権利を得ることができる。
春樹は恋愛する権利を得る事ができるか？

プロローグ

・・・冷静になれ、オレ。

これは一体どういうことだ？
何でこんな事になつてている？

ここは一体全体何処なんだ？

イヤだから・・・落ち着けよ。疑問符ばかりじゃ状況が確認出来ないじやないか。

まず、オレの名前は成沢 春樹。
私立直江学園の本校の2年生だ。

・・・よし、自分の事が分かる程度には冷静になれた。
そして、田の前には幼馴染である立川 梨乃。
ここまで良い・・・だが問題はその距離だ。
どう見ても三角定規一個分より近い。

ほんの少し動けば、ただそれだけで触れてしまう距離感。
長い付き合いでも、こんな距離で見るのは初めてだった。

「おい梨乃。これは何なんだ」無駄と思いつつ聞いてみる。
「何なんだ、つて何がかな？」とぼけた顔で聞き返す梨乃。

「この状況は何なのか、を聞いてるんだ」

「そんなの私が知りたいよ。だってここに連れて來たのはハル君だよ？」

「・・・は？」連れて來たのが・・・オレ？

いや、そんなことは無い・・・と思つ。

イヤイヤ、オレはそんなことした憶え無いんだからありえないだろ。
イヤイヤイヤ、でも梨乃がそんな面倒くさい嘘をつくとも思えないよな。

イヤイヤイソ、「もついい加減辞めたら?」妙に上氣した呆れ顔で突

つ込んできた。（・・・どうでもいいが心の中に突っ込みを入れるのは辞める。）

「じゃあ質問を変えよう。なんでお前はそんな距離に居て、オレは押し倒された形になつてるんだ？」

「そんなことよりつて・・・うわ、近い近い！一体何なんだ？」

「これはいつもの梨乃じゃない。」

そもそもオレがこんなギャルgeeとして有名な某ギャルgeeのよつにするはずが無いだろう。

そうだ！これはきっと泣きgeeとして有名な某ギャルgeeのように夢オチなんじやないか？

神様がオレの今までの人生を評してオイシイシチュエーションを用意してくれたんだな。

フツ、いくら夢オチとは言え粹な計らいをするじゃないか。神よ。
・・・・・・・・・・・・なら、この田の前に広がっている
パライソ樂園を存分に満喫しようじやないか。

据え膳食わぬは武士の恥と言つし、それが神によつて据えられた膳ならなおさらだ。

そう思つた瞬間・・・オレは。

不敵になつた。
無敵になつた。

イヤ、神だ！！！

梨乃是目の前で目を閉じてゐる。・・・よし。

「いつただつきま～す！！」

「ガン！！！」

「痛エ！！！」思わず叫ぶ。

何か硬いものにぶつかつた。

それは分かった。

だが真っ暗で何も見えない。

どうじよつ。

何が起こったのか分からぬ。

・・・・・あまりのショックに箇条書きになってしまった。

「痛エ！…！じゃないよ。早く起きてよ。もつ何度も起こしてるんだよ？」呆れた顔で立っている梨乃。

「・・・・なんだ、夢の続きをか」ホソと胸を撫で下ろす。どうやらさつきの硬い感触は気のせいだったようだ。

「何の話？夢つて」呆れた顔から怪訝な顔へと変わった。・・・あれ？ そういうればいつ立つたんだ？

考えを巡らせていて、

「じゃあ、着替えたたら降りてきてね。『飯作ってるから』と言つて部屋から出て行つた。

・・・・・

ああ！夢から覚めたのか！！

やつと氣づいて、溜息を吐ぐ。・・・結局何も出来なかつた。

夢オチはともかくタイミングを考えて欲しい。

ま、考えてもしょうがないか。

大きく伸びをしてからもう一度溜息を吐いて、オレは着替えを開始した。

こつもの登校

「じゃ、行つてきま～す」と言つて玄関を出る。とは言つても家には誰も居ないので返事は無い。鍵を掛けてから歩き出す。

その後ろを小さい生物がトコトコとついてくる。

「私、そんなにちっちゃいかな・・・？」本気で落ち込んでいる梨乃。（だから何で心の中を読むんだコイツ）

「なんだ、居たのか。小さくて見えなかつた」さわやかに微笑みながら言う。

「え、朝起こしたの私だよね？朝ごはん作つたのも私だよね？その間気づいて無かつたの？」ものすごく不安そうな顔をしている。「何を言つているんだ梨乃。オレを起こしたのは精靈だぞ？朝ごはん作つたのは自分だし。お前寝ぼけてるんじゃ無いのか？」わざとらしくボケる。

「あ、なんだ冗談か」途端に安心する梨乃。

「な、何で冗談だと思うんだ？」・・・まさかとは思うが。

「え？ だつてハル君そう考えたし」やつぱり！――

「何なんだ、お前。さつきから人の心を読みやがつて。オレの人権はどうなつちまうんだ！！！」大げさに頭を抱える。

「やだ、冗談だよ。ただハル君が分かりやすいだけだよ」にこやかに笑つてゐる。

・・・その微笑みも今では何かを企んでるようにしか見えない。

「何も企んでないよ」・・・・・・・もうイヤだ・・・

「こんな人権無視したチートキャラ、誰が考えたんだ！！そいつはきっと史上稀に見るクソ野郎に違ひない！！！」

こんな事言つたら自分の身に何が起こるか分からぬが、この不条理を嘆かずに入れようか。

「だから冗談だつて。長年一緒に居るんだからある程度考へてる事

ぐらい分かるよ」

「ゴメン……オレには梨乃の考えは全く分からない。

「でも、本気で思ってるの？」心配そうに聞いてくる。

「え、何が」

「私がちっちゃいって」

「なんだその事か。

「思つてね～よ」これは本当だ。実際梨乃はそんなに身長が低くない。

むしろ女子にしては高い方だと思う。ただ、細すぎるせいでの小さく見えるが。

「良かつた」本当に嬉しそうに笑う梨乃。

それにしてもやっぱり梨乃は心が読める訳じゃないんだな。

まあ、そうだよな。完璧に心の読める人間なんていたら、オレは人生投げ出してしまつかも知れない。

それがもし梨乃だったとしたら、今までの心のほとんどを読まれている事になるから、“かも”じゃなく確實に人生を投げ出すだろう。そう考えると、梨乃をそういう風にしなかった人に感謝しなければな。

さつきはクソ野郎とか言つてすまなかつた。本当に悪いと思つてる。むしろ史上稀に見る人格者だと、言わせてもらおう。

「そうそう。そう考えた方が良いよ」

・・・
・・・・・・・・
心折れそう。

しばらく歩いた所で、見慣れた顔を見かけた。

「抜き足、差し足、忍び足」と足音を殺して背後から近寄る。

梨乃は不思議そうな顔で見ているが、気にしないことにする。

あと3日ほどに迫ったところで、

「何をやっているんだ。春樹」今まさに驚かせようとしていた奴に声を掛けられる。

「やつぱりお前を驚かすのは無理か」苦笑しつつ言つてみる。

「俺に気づかれずにこんなに近くに来れるとはな。お前の気配の消し方もなかなかだぞ」後ろを向かずに返事が返つてくる。

「また気配の消し方教えてくれよ。次からは絶対にばれないようになりたいし。というか、お前なんでおしゃべりで分かつたんだ?」こいつを見てないのに

「気の流れだ」自信満々にそう断言する。意味が分からぬ。

「あつそ。ま、一緒に行こうぜ」「分からぬ事は流しておけばいいや。

紹介が遅れたがコイツは西園寺 健太。さいえんじ けんた無駄にカッコいい名字と果てしなく平凡な名前を持つ格闘才オタクだ。今までの会話からも分かるように、気配や氣を探る方法を教える事ができるほど武道を極めているらしい。

「そういえば今日は小テストがあるな。勉強はしてきたのか、春樹よ」

「ん、イヤ特にはしてないけど」と言つたか全くしてない。それどころか、「今日つて、テストあつたつけ」という有様だ。

「あるよ。数学と物理と英語。合格点取らないと再テストになっちやうよ。まあ、ハル君には関係無いけど」

「確かに。春樹は頭だけは無駄に良いからな」妙に頷く健太。

「オレをモヤシみたいに言つんじゃねーよ」嫌そうな顔を作つて否定してみる。

「でも、実際勉強できるじやない。授業は全然出てないけど」ダメだよ、といつ顔をして言つてくる。

「・・・・・」

「何急に黙つてるの?」・・・イヤ、ただいつまでこの感じが続くのか不安なだけだ。

このままじやいつまで経つても話が進まないじゃないか。

こんな意味の無い会話を聞かせられたところで、きっと読者は飽きてしまうだろ？

さつむと場面転換したい。いつもは短く感じる通学路もとても長く感じる。校門よ、早く姿を現してくれ。

それともアレか、読者を飽きさせてでも伝えたいことがこのシーンにあるとこりうのか。

・・・・・だつたら箇条書きで良い。早くこの会話を終わらせてくれ。誰でも良い。悪魔でも・・・

「ハル君は頭が良くて何でもできる万能型の天才だということ。ハル君は授業サボリの常習犯だということ。私はハル君の世話を焼いているということ。健太君はあまり勉強が得意じや無いこと」

・・・・・・・・・スラスラとどうもありがと。なんだか、今の梨乃はなんか、いつ・・・別の世界からの干渉を受けているような気がするな。

ほら、伝えたいことが伝えられたから、（多少無理矢理でも）校門が見えてきた。実に単純だな。

なんて、無駄話や無駄な考えを巡らせながら、今日もオレたちは校門をくぐる。

SSCメンバー集結

「ダメだよ。仮面で話しかけてきて。^{うそ}」

教室に着いてカバンを置いた瞬間に一体何なんだ。

「何がだ？ 何の前振りも無しじゃ分からねえよ」 いつも仮頂面で

「色々言いたい事はあるが、順を追つてダメだししてやる。まず、あのプロローグだ。あれは何なんだ? まんま某ギャルゲーの出だしじゃないか。少し設定を頂くくらいならまだしも、お前の自問自答のぐだり、あれほんとどそのまじじゃないか。そりまでするなり、タグにちゃんと付けておけよ・・・・・・・・・おい、聴いてるの

九成汎

「お前は一体何を言つてゐるんだ」全く訳が分からぬからどう返せばいいか分からんじやないか。

「何って、だからダメだしだよ」・・・ダメだ、会話にならん。

お前に晤く意味ア田か事を言ひ出さなか」方三に

いま別の次元の視点から喋つてゐるらしかつた。

「もういいんだろ。そんなに文句言うたら世間が何も変わらんだろう」

「いや、まだ言ひ足りないぞ。またSSCの活動全く書いてないと
か。タグにスポーツつて付いてるけど早くスポーツしろとか。2話
での西園寺の紹介はもつとしつかり素早く正確にとか。タグの数少
な過ぎとか。グダグダしないで話進めるとか。作品紹介で意味深
な事書いてるけど、さつさと説明しろとか。そんなんだから感想が
少なくて、これを読んでくれる人も少な・・・」オレは黙つて口を
塞いだ。

「ちょっと黙れ、それ以上喋るとお前は確実に消されちまう」そう

言ひてから手を離す

「待て、一番言いたいことが残ってる。それだけでも言わせてくれ」

「じゃあせつやと並ぶ。ただし、ダメだと判断したらすぐ口塞ぐからな」もし本当にダメだったらぶん殴って止めてやる。そう心に誓つてから、

「さあ、言えよ」とわざやかに笑いかけつつ言った。

「僕を出すのが遅い！……！」・・・・・はい？

「えつと・・・何？」

「だから、僕を出すのが遅いんだよ。読者はお前のよつた肩キャラよりも僕のような魅力あふれたキャラクターを望んで居るのだから！！！」

力説されても困る。といつか自分で魅力あふるとか言つたな。・・・
といつか、

「そんなものオレ達がどういづできる問題じゃないだ。どうして
も早く出たかったならオレの家の前にでも張つてろよ」

「そんな事したら凄く出たがっている奴みたいに思われるだろ。そ
うじやないんだよ。僕は自然な流れで出たいんだよ。といつか、さ
つさと僕の紹介しろよ。読者はもつそろそろ『コイツ、誰だよ』つ
てなるぞ」

・・・・・むづ、どうでも良いや。

さつきから、ゴチャヤ、ゴチャ言つてるコイツは淡雪 あわゆき 氷河 ひょうが

PCと博打（特に麻雀）を愛する学年一位（仮）の秀才君だ。おま
けに小さい頃は外国に住んでいた帰国子女・・・らしい。本当にど
うかは知らん。

「それより、立川はどうした。今日は一緒にやらないのか」やつとま
ともな会話ができるな。

「あいつは教務室に行つてゐよ。何か出すものが在るんだつてや」
朝一番で出すとは、真面目な梨乃らしく。

「ほう、そうか。ならば心置きなく作戦を練らうではないか」「いや
りと嫌な笑いを浮かべつつ言つたなよ。

「何のだよ。今日は特に依頼無かつただろ」

「イヤイヤ、無いからこそだ。最近刺激が足りんと思わんか？」「

「思わない。したがつてお前とろくでもない事はしない。大体まだ入つてないだけで、これから依頼あるかも知れないだろ」

「むう、そうか残念だ。まあ仕方ない。立川も帰ってきたところだし、今日はやめておこう。だが僕は諦めない。気が向いたらいつでも声を掛けてくれ」

梨乃が不思議そうな顔をしながら、「ん? 何だつたの?」と尋ねて来たが、オレは何も言えなかつた。

突然だが、少し昔話をしよう。オレには、かつて苦手なものが二つあつた。

一つ目は実家の人々。つまりはオレの両親、曾祖父、両親の兄弟（叔父・叔母夫婦）、そして従兄弟。

何故苦手だったかはひとまず置いておくとして、この一つ目は未だに苦手だ。

二つ目は いぢらは今では信じられない事だが 女子だつた。

もちろん全く話さない訳でも、関わらないわけでも無かつたが、それでも常に微妙な嫌悪感があつたのは事実だ。（梨乃だけは別だ。）

だがこの学園に来た際に つまりは家を出て一人暮らしを始めた時に ある女と出会い、オレは女子へのイメージが一変した。そしてあるエピソードにより女子への苦手意識を克服するのだが、今重要なのはそのエピソードではなく、ある女・・・つまりSSCメンバーの最後の一人、川柳 花凜かわやなぎ 花凜かじん の紹介だろう。

その名の通り凜とした見た目をしているのだが、性格はスッキリしている・・・なんか違うな。・・・何というか、サイダーっぽい。スカツとして気持ちいいというか。そしてノリが良い。

見た目はどこかのお嬢様のように気品漂つているが、初めて会つた人は清楚な見た目とギャップのあるテンションの高さに驚かされる

事も多い。

そして花凜の最大の特徴は、なんといってもその身体能力の高さだ。おそらく学園のどの部活に入り何の競技をしてもヒースになれるであらう。その身体能力は、おそらく言葉では伝わりきらないだろう。まあ、紹介はこんなところで良いだろう。

SSC（正式名称直江学園生徒支援部）は、オレと梨乃、氷河、健太、そして花凜の五人で活動している。正式に部活として活動しているのではなく、あくまで同好会扱いだ。

活動内容は、名称そのままで生徒の支援だ。物搜しから部活の助つ人、生徒の相談相手と活動は多岐に渡る。

そしてSSCを発足させたのが、何をかくそう川柳 花凜なのである。

その花凜が、始業きつかり十分前に入ってきて、漫画を読んでいた俺に一言。

「早速依頼が来たよ。放課後いつもの場所に集合ねーーーーーーーー朝一番会つて第一声がそれかよ。

「分かつたけど、いきなりそんな事言つなよ。毎休憩とかでも別に良いじゃないか」わざと嫌そうな顔をして文句をつけてみる。

「あーゴメンゴメン。朝一で依頼あつてテンションあがっちゃつてさーーお前はいつもハイテンションだろ。といつか、落ち込んでるところ見たことねえぞ、オレ。

「ほら、さつさと席つけよ。もつそろそろ担任来るぞ」始業までまだ時間はあるが。

「お~悪いね、春ちゃん

「それは止めろつて前言つただろ」

「冗談だよ。春樹っち」・・・新パターンできやがった。

「もういいから、さつさとしろ。ホントに担任来ちまつぞ」
「了解」颯爽とそう言つて自分の席に着いた。

やつと席に座った。ふう、あこつを相手にすると疲れるな。

というか、依頼来たのか。今日は何もしなくて良いと思つてたのに。
・・・一応誤解の無いように言つておくが、別に花凜の事を煙たが
つている訳でも嫌いなわけでも、ましてや強制的にSSCに入れら
れているわけではない。

むしろオレは 誤解されるのを承知で言つが 花凜の事が大好きだ。
大大大大好きだ。感謝もしてる。

まあ、これは他のSSCメンバーにも言える事なので（本人たちに
はもちろん言わない。あと断つておくがオレはノーマルだ。^{ボイ} そういう
^{ズラブ} 趣味は無い）別に花凜が特別というわけではない。

そして、SSCだ。オレは自分の意思でSSCに入っている。まあ、
それも事情があつての事なのだが、少なくともSSCメンバーのせ
いではなくオレ自身の問題である。

・・・まあ、それもおいおい語つしていくとしよ。

以下の懸念事項は、放課後の依頼だな。
今日もまた、一日が始まる。

Request : 1 スタート(前書き)

やつと本編スタートです

Request : 1 スタート

放課後になった。

言われた通りにいつもの場所（俺たちの教室である2-B）に集まる。（というか居座り、残っている。部活ではなく同好会なので部室が無いのだ。）

依頼の前に、SSCのルールを説明しておこう。

- ・ 基本的に依頼には全員で全力で取り組むこと。
また、決して依頼された内容を超えてはならない。
- ・ 同時期に複数依頼が来た場合は、担当者を決め活動に取り組む。
また、活動は先に依頼のあつたものを優先する。
- ・ やむを得ず活動に参加できない場合、依頼の内容を聞くことを許可しない。（依頼を聞いた場合は必ず参加しなければならず、途中で抜ける事も許されない）
また、自分が参加しない依頼については一切の口出しをしない事。
途中参加する可能性のある場合も、参加が確実でない場合は依頼を聞かない。
- ・ また、途中参加した場合はメンバーから依頼の説明・依頼主への紹介をされること。

この四つだ。

分かりづらいものもあるが、つまりは依頼主のプライバシーを守りつつ全力で依頼をこなせ、ということだ。

さあ、今日の依頼を開始しよう。

「じゃあ、詳しく話を聞かせてくれるかな。」目の前の女の子に向かって言う。

「あ、はい。あの、私、野球部のマネージャーなんんですけど、その、今日は依頼をお願いするために来ました！！」目の前の女の子は興奮気味にそう切り出した。

「あ、オレは成沢 春樹です。で、依頼の「内容は」と言おうとしたところで、

「あなたが有名な成沢先輩ですか！…お目にかかれて光榮です…！」

！」

・・・キラキラした目で言られた。眩しいじゃないか。

「あ、ありがとう。それにしても、オレって有名なのか？」

「有名ですよ。先輩から、『あいつは行事壊しの常習犯だ』とか、

『あいつは女たらしだ、気をつける』とか、『ボールを投げたら人が死ぬ』とか、『バットを振つたら必ずホームランになる』とか。

「え〜っと、それは誰が言ったの？」さわやかに笑おうとする。・・・

・が、ちょっと引きつってるのが分かる。

「あの、野球部の先輩です。」・・・あいつらか。憶えてろよ。

「ほらほら、雑談もいいけどさ、せっせと依頼の内容聞いちやえよ

♪ 花凜が言ってくる。

「そうだな。じゃあ聞かせてくれるかな。」

「あの、今週の土曜日に練習試合があるんですけど、うちのエースが怪我しちゃって。それで、その試合はシード権を賭けてるんです。でも、ピッチャーが居ないと試合にならなくて。もちろん、他にもピッチャーは居るんですけど、その、今回は練習試合なんでエース一人で大丈夫だと思つてて、他の人はこの試合に合わせて調整して無いんです。それに、やっぱりシード権があるのと無いのではかなり違つて来るんです。だから、助つ人をお願いします！！」

最もポピュラーなケースだな、部活の助つ人。土曜日か、明後日じゃないか。

「じゃあ、いくつか確認するから答えてね。」梨乃が言った。マネージャーが頷く。

「その依頼は部活としての依頼なのか、それとも君個人の依頼なの

が、どうだ。」氷河が聞く。

「えっと、一応部活として、だと思います。先輩に言われたので。」

「この依頼は、試合に勝てれば良いんだよね？」今度は梨乃だ。

「え、はい。まあ、試合に勝てれば、良いです。」

「という事は別に助つ人無しでも勝てれば良いのか？」次は健太。

「ええ？ えっと、良い・・・と思います・・・多分ですけど。」

迷いながら答える。

「この依頼をこなす為に、我がSSCが練習に参加しても良いんだよねっ？」花凜が尋ねる。いつもより歯切れが良い。運動系の依頼だから嬉しいのかもしれない。

「はい、それはもちろん。今日からでも良いって。」

「・・・」最後はオレか。まあ、別に聞かなくても良いんだが。・
・ そうだ。

依頼にはあまり関係ないけど、と前置きしてから

「エースの怪我は大丈夫なのかな？」と聞いてみた。

「あの、大丈夫です。怪我と言つても捻挫ですから。一週間もしたら球も投げられますよ。」

「そう、なら良かつた。」

これで確認は終了だ。

「あの〜、それで、引き受けますか？」上目遣いに尋ねてくる。うわ、またキラキラしてるよ。

目で他のメンバーに尋ねる。・・・断る気は無さそうだな。

「もちろん。すぐにグラウンドに行くから、先に行つて伝えてくれるかな。」

そう言いつと、良い笑顔で

「ありがとうございますーーー」と言つて走つていった。

Request : 1 グラウンドにて part : 1

オレ達は今回の依頼について簡単に打ち合わせをした後、ジャージに着替えてグラウンドに向かつた。

「よう成沢、待ってたぞー！」妙に体格の良い野球部員がバシバシ背中を叩いてきた。

・・・・・痛エな。

「(イ)の依頼は久しぶりですね、たばた田端先輩。キヤプテンはどうですか？」そう。野球部に来るのは初めてでは無い。この田端先輩の事も以前の依頼で知っている。

「おいおい、主将は俺だぜ、成沢！忘れたのか？」

「あ、そうでした。すいません、忘れてました。じゃあ、田端キヤブテンに今回の依頼について確認させてもらいます。」

「成沢、前も言つただろう、キヤブテンとか主将とかつけないでくれって。」

「じゃあ、田端さん。今回の事ですけど、」

「お前らに全面的に任せる。前回までの事でお前たちの力は分かってるからな。なんなら試合までの練習もお前らが指揮を執ってくれても構わん。」

・・・・・速いな。確認することもう無いじゃないか。

「早速ですけど、全員集めて貰えますか。実力を確認したいんで。」

「おう、少し待つてる。もうすぐ着替え終わると想つ。・・・・あ、そうだ。」

おおつと、何なんだ？急に近寄ってきた。

「な、何すか。」少し慄きながら聞く。体格いい奴が近寄ると超怖H。

「一年生はお前らの事知らないから、『チャチャ』言つよつなら去年と同じ方法で黙らせても良いぞ。今年の一年は生意気だからな。良い薬になるだろう。」

・・・別に小声で言わなくても。・・・というが、
「そんな事、言われなくて済むつもりですよ。」オレはさわやかな顔でそう言った。

五分経つて、野球部が俺 残りのUUCメンバーは野球部の後ろだ の前に集まる。

「一年生以上は知ってると思いますが、オレはUUCの成沢 春樹です。依頼を受けて助つ人にきました。」

一年生以上は黙つて聞いている。一年生は疑問があるような顔をしているが、無視して続ける。

「依頼の内容はシード権を賭けた土曜日の練習試合に勝つことです。その為に練習を見にきました。

じゃあ、実力を確認したいので最初にテストをします。」

「質問でっす。それは誰が依頼したんですか?」一年生らしき奴が質問する。

「それは、野球部全体だ。正確に言えば一年以上の全員だな。」田端先輩が答える。

・・・この機会に質問全部捌いとくか。
わけば

「他に質問ある人いますか?」

「あの、テストって何をするんですか?」この質問も一年だ。

「普通ですよ。守備練習、走塁練習、打撃練習、投球練習の四つです。投手じゃない人は投球はしなくても良いんですけど、受けたい人は受けても良いですよ。良い結果が出たら試合で投げられるかも知れません。」

「お前、腕落ちてないだろうな。」同じクラスの矢沢やざわだ。そういうば野球部だったな。

・・・それは質問じゃないだろと思ったが、まあ良い。答えよう。オレはニヤリと笑つて、

「当たり前だろ」と言つた。

一人一人テストをこなしていく。野球部のリストは氷河が作った。「田端さん、このメンバーでどうですか?」テストもかなり終わりに近づいたときに仮想メンバー表を作つて、見せてみる。

「どんな感じだ?・・・何?お前たちの名前が無いじゃないか。」

「いや、一応ですよ。野球部も助つ人無しで勝つ方が良いでしょう?」

「ん、そうか。他は・・・何で投手のところは空いてるんだ?」「それは今テスト中ですか?」

「なるほど、他は・・・まあ良い。今回は任せてるからな、口出ちはしない。」

「じゃあ、これをベースにしてメンバーを組みます。」

・・・そして、全員のテストが終わった。

「次に、紅白戦を・・・」と言おうとした時、

「聞きたい事があるんですけど~」若干ガラの悪い一年生が聞いてくる。

「あのさ、俺達全員テストしたけど、あなたはどうなんだよ。テストしねえのか?といふか、あんたせつから偉そうに喋つてるけど、野球できんの?」

・・・来たか。去年よりタイミングが早いな。確かに生意気だ。実力で捻じ伏せてやろう。

「ふ~、なら君自身と勝負しよう。それでオレが勝つたら文句無いだろ?」

「良いッスよ。オレ野手なんでバッターやります、一打席で十分ッスよ。」

「一打席で良いのか?後悔するぞ。・・・今からこの生意気なガキをボコボコに出来ると思うとニヤけちまうな。」

「見てください、先輩。俺、打ちますよ!~」野球部の全員に言

つた。一年生達は本気で盛り上がった。先輩達は笑つて返している。
・・・・・この空氣も表情も読むことが出来ない一年生は、気づかなかつたようだ。

先輩達の笑いの中に、哀れんだような、可哀想な者を見るような視線が含まれていた事に。

Request : 1 グラウンドにて part : 2

キヤツチボールをしながら肩を慣らしていく。

「氷河、もうそろそろ座つてくれ。」大分肩が温まつたところでの氷河に座つて貰う。

そして、軽く球を投げ込んでいく。

ポスン。

「へッ、ショツボイ球だな。蚊が止まるぜ。」笑いながら挑発して来る。

無視して球を投げ続ける。

ポスン。

「よし、もう良いぞ。打席へ入れ。」呼びかけてやる。

何も言わずに打席に入る・・・意外だな。もつ集中してやがる。

「田端さん。審判お願いします。」審判は任せぬ。田端さんなら誤審はないだろ？

「じゃあ、さつさと投げちゃつて下を~い。」・・・いちいちイラツとさせる奴だな。

振りかぶつて、球を投げた。

ズバン。

「ストライク！」

インコース低めの良いことに決まった。油断している奴にはまずあの「ースは打てない。

悔しそうな顔をしている。・・・何だ、そんな表情もできるのか。

「さつさと次投げるよ。今のは油断しただけだ。」吐き捨てるよつに言つた。

・・・おおつと、さつきと集中力が全然違うな。これはこっちも本気で投げないと。

二球目。

さっきよりも大きく振りかぶる。

奴は集中して構えを取るが、そんなのは関係ない。

力を込めてタメを作り、オレは球を渾身の力で放った。

ブンッ。

空振りの音が聞こえる。

・・・しばらくしてから、
・・・・・ポスン。

「ストライク。」田端さんは笑いを堪えながら言つた。
さつきまで五月蠅いづみおく応援していた一年生達が、静まり返つた。

スイングしたまま止まっているチャラ一年。・・・まあ無理も
無い。初めて見た奴は大体こんな反応をする。

やつと体勢を戻して来たので、言つてやつた。

「どうだ。オレの必殺技ウイニングショットは。」

「何が“ウイニングショット”だ。ただのスロー・ボールじゃねえか

！」怒りながら言つてくる。

「その“ただのスロー・ボール”にお前は空振りしたんだぞ。」ニヤ
ニヤ笑つて言つてやる。

「ま、まだ後一球あるからな。まだお前の勝ちじゃね~ぞ。」

「じゃあ、次の球行くぞ。」

「『チャヤ』『チャヤ』言わば早く投げやがれ。次は打つてやるよーーー。」

三球目。

オレは何も考えず腰を捻ひねつた。

そしてそのまま、じ真ん中に向けて腕を振りぬく！
ズドンッ！ーー！

チャラ男（仮）はバットを振ること出来ない。
することすら出来ない。
否、反応

「田端さん、判定は？」白々しく笑いながら催促せこそくする。

「もちろん、ストライクだ！」

「よ~っし。これで文句無いだろ？一年坊主。」

・・・黙つている。悔しいのかも知れない。

「おい、成沢。お前、ちょっと手加減してやれよ。一打席限定で初見なら、打てる奴ほんどいないぞ。」氷河が口を尖らせて呟つ。

「変化球投げないだけでも十分手加減してるだろ。」

「最後の一球、あれはダメだと思つぞ。いくらなんでもトルネード投法まで使うなよ。」

「ま、良いじゃないか。一年生への土産だと思つて。」減るもんじや無いし。

「ハル君！－はい、さつきの投球の球速。」梨乃が寄つてきてメモ帳を見せてきた。

「どれどれ、見せてみる。」氷河が奪いやがつた。まあ良いや。

・・・なんで無言？

黙つたままメモ帳を突き出してきた。・・・何なんだ。

一球目	127 km/h
二球目	65 km/h
三球目	134 km/h

うん、何というか・・・やり過ぎたな。ただでさえ必殺技スロー・ボールの後の球は速く感じるので、最後の球が一番速いとは。あまり本気で投げないよう肩はそんなに温めて無かつたんだけど。ま、ともかく。

「じゃあ、これで全員文句無いよな。次は紅「白戦だ、と言おうとした所でまた遮られた。

「まだだ、一打席ぐらいならまぐれかもしれない。」しぶといな。・・・正直ウザい。

「分かった、分かった。じゃあ、残り三打席だ。一本でもヒット性の当たりが出たら勝ちにしてやるよ。」一試合が大体四打席だから、文句は無いはず。

「待った、その中の一打席僕に投げさせてくれないか？久しぶりに投げたい。」

「・・・氷河、そんな事許される訳が」「あ、アタシも投げたい。」
・・・頼むから話を聞いてくれ、花凜。

「という訳で、残りの三打席は成沢、僕、花凜の順番で投げるが、
それで良いよな?」有無を言わさぬ迫力で詰め寄る氷河。

「別に良いッスよ。けど、だれか一人でも打たれたら当然あんた達
の負けだぜ?」

「もちろん、望むところだ。チャラ男君。」ああ、こいつ完全に潰
す気だ。ていうか、チャラ男って言つちやつた。オレでも言つの我
慢してたのに。

「誰がチャラ男ッスか。俺には平井って名前があるんだよ。」

「ほらほら、もう良いじやんそんな事。さっさと勝負しよーーー!」

無駄に朗らかだな。こんな時はそれに感謝するぜ。花凜よ。

平井君は安易にこの条件を受けた事を確實に後悔するだろつ。

特に、最後に控えている花凜の球を打席で見たとき、確實

に。

Request・1 グラウンドにて part・3

結果として。

オレは結局一回も変化球を投げることなくチャラ男を空振り三振に打ち取った。

正直さつきの一打席よりも集中力に欠けていたので楽だった。何故なのが断定は出来ないが、予測は出来る。

おそらく、最後に投げるのが花凜女子だからだ。

こういうタイプの人間は男である事、ただそれだけで女より上位に立っていると考えるという、与謝野よせの晶子あきこさんが聞いたら怒り出すような理論を信じている傾向がある。

そんな事だから、所詮女子が投げる球だからショボイだろうと高をくくり、最終的に自分の首を絞める事になる。

二打席目の対氷河戦も、そんなこんなで集中力は皆無、氷河が投げた変化球にかする事も無く三振に倒れた。

そして、運命の最終打席　　否、運命は既に決まっている。花凜の勝ちだ。

一打席目ならともかく、一打席目ならオレの今日の調子（肩もまともに温まってない状態）では打てない事は無かつた。

だが、最後に投げるのが女だというだけで氣を緩め簡単に三振に屈した時点で勝負は決した。

氷河の球も初見で打てる代物では無かつたが、本当にセンスの良い奴ならば打つまでは行かなくとも当たることが多いは出来たようだ。

思つ。・・・だが、そこも氣を緩めたまま三振。

残念ながら、花凜の球を打つのは不可能だと言つて良い。

今日のオレと氷河などとはレベルからして違う。

花凜は・・・本物なのだから。

「すいません、田端さん。プロテクターとマスク貸して貰えますか？」

「ん？ああ、もちろん良いぞ。そうしないと危ないしな。」田端さんは笑いながら言った。相変わらずよく笑う人だ。

「お~い、誰か持ってきてやつてくれ。」言われて、すぐに一年が取りに行く。教育が行き届いてるな。

キヤツチヤーマスクとプロテクターを受け取る。・・・何か怖がってるみたいだな。仕方ない。

「ありがとう。助かったよ。」自分に出来る最高の笑顔を一年に向ける。

「別に大丈夫ですよ、このくらい。・・・・あまり効果は無かつたようだ。

装備を身に付ける。花凜はウズウズした様子でボールをいじつている。

「早く座つてよ、春ぴょん。投げたいんだ~。」「何なんだ、その呼び方。もうちょっとまともに呼べ。」座りながら言ひ。

「まあ、良いじゃん。春ちゃん。」・・・せめて統一しぃ。「ほら、早く投げて来い。軽めでな。」花凜は分かったような顔をして頷いた。

そして、投げた。

・・・・・ボコ。

物凄く遅い球がミットに収まった。山形の。
ちょっと緩すぎだな。素直と言つか何と言つか。

「もうちょっと強めで良いぞ。」

「何km/hぐらいで投げれば良い?」――「顔でさづらひ。・・・は?お前調節出来るのか。

「じゃあ、125km/hくらいで。」そつと言つた花凜はそのしなやかな体を捻り、腕を振り抜いた。

ドン。

心地良い感触が手の中を駆け巡る。

「ゴメン、少し速かつたね～。」花凜が謝る。

「梨乃、今の球、何km/hだった?」遠くに居る梨乃に聞く。

「127km/hだったよ。」・・・・・・・・本当に少しだけ速いな。

ボールを返して座る。

ドン。

「今のは?」また梨乃に尋ねる。

「125km/hだよ～。」

どうや～り。

オレの花凜への認識はまだ甘かつたらしい。

「ね～。もう良いじやん、早く勝負しよ～よ～」もひちよつと落ち着け。

「肩はもう大丈夫なのか?」まだ三球しか投げて無いのに。

「大丈夫さ。二人が戦^やつてる間に投げてたから。」

さいですか。

「と、言うわけで。もう打席に入ってくれるかな。」ダルそうな雰囲気で打席に入る。

・・・明らかになめてるな。まあ良い。どうせ打てない。

サインを出す。遊びで野球をする事があるので、サインはそれを使う。

花凜は頷き、

先程と同じように 先程よりも大きく 体を捻り、要求したコースに振り下ろす！！

ドボン！！

痛つて――――――――！

要求通りのインコース高めに来た花凜の球は、しかし要求以上の球威を持つミットに収まる。

収まると言つても、その反動でオレの体も持つていかれた。

「テメエ、花凜！本気で投げすぎだろ！！オレの手をブツ壊す氣か

「……」叫んで訴える。

「あ、メンゴメンゴ。イヤ～少しおおきな大丈夫かなって。」悪びれずに笑つて言う。

「大丈夫な訳無いだろ……まだジンジンするわ……」

「田端さん。今の球どうでした？」人の話を聞けよ！！

「え？ああ、ストライクだ。ストライク。」田端さんは驚いた顔をしている。前の時も見てるのに。

「なあ、成沢。川柳の球、前より速くなつてないか？」

「・・・」

「成沢？おい、どうした？」

「いや、いつも一緒にやつてるから分からないんですよ。」もし本当にそうならかなり困る。

「早く次の球投げたいな～」

クソ、本当にオレの手を壊す気が。

サインを出す。一瞬嫌な顔をしたが、首は振らずにモーションに入る。

シユン。そんな音が聞こえてきそうな感じで、球を投げる。さつきの球よりも遅い。チャラ男もそう思つたのか振つてきた。タイミングも合つている。

・・・だが。

ミートしたと思った瞬間、球は横にスライドした。ミットに収まる。

空振りだ。

「ストライク！」田端さんのゴール。これでツーナッシング。花凜は二コ二コしている。そんなに体を動かすのが嬉しいのか。三球目。

さつきまでと同じようにサインを出し、花凜は振りかぶる。さつきまでと同じように投げた。

同じくらいのスピードでボールが迫つてくる。

打席の前で球は大きく沈み、ワンバウンドした。

・・・だが、

「ボール。」

今度はボールだった。

ボール球を振らせようとしていたのだが、振らなかつた。

これで終わらせようと思っていたのだが。・・・仕方ない。

「花凜。次はアレだ。」この球はサインが決まって無い。だから口で伝えるしか無いのだ。

「え、アレ？まだ完成していないじゃんか～良いの？」

「ああ、良いんだ。八割方完成してるし、実践で使わなきゃ多分完璧にはならないから。」

花凜はそれ以上何も言わずに投球フォームに入る。

体を捻り、しなやかな腕から球が放たれる。

今度はバットを振つてきた。

初球と同じぐらいの球のスピード。振り遅れているが軌道は合つているので、口ぐらにはなる可能性があつた。

しかし。

バットに当たる直線で鋭く落ちた。バシン。

「ストライク。」

「よ～っし。これで俺等の勝ちだな。」ん?何か田端さんがこっちを見ている。

「何ですか？聞きたい事もあるんですね？」

「ああ、その、最後の球、あれは何だ？速くてよく分からなかつたんだ。」

「・・・アレは高速低回転ボールですよ。ストレートと同じ速さで投げるんですが、回転をわざとかけないんです。そうすると空気の壁にぶつかって変化するんですよ。」

「ほう、本来回転はかかっていた方が良いものを、逆転の発想であえて回転を減らすのか。よくそんな事思いついたな。」

「オレが思いついた訳じゃ無いですよ。あるマンガで主人公が投げ

てたのをマネしただけです。」

「ほう、そうか。ま、平井も今回のことは良いクスリになるだろ?」

「そうなると良いんだが。

「じゃあ、今度こそ紅白戦しましょ?。呼んだ順番に並んでください。

い。」

そして、やつと実力チェックの最終関門、紅白戦を開始した。

Request : 1 グラウンドにて part : 4

「成沢。もうそろそろ良いんじやないか?」田端さんが聞いてくる。「何がですか?」今オレは部員の実力チェックに忙しいので、グラウンドに田を向けたまま言ひ。

「お前も紅白戦に出て、一年生に実力を見せておいた方が良いんじやないか?」

「さつきの対戦で実力は示せたと思うんですけど。」チャラ男は、記録を見る限り一年生の中では上手い方だ。

「いや、そなんだが・・・一年生は川柳の方に尊敬を集めてしまつていてるみたいだからな。お前は結局ストレーントとスロー・ボールしか投げてないし、あまりインパクトが無かつたと思うんだ。」

「まあ、そうですね。せめてスロー・ボールじゃなくサークルチェンジだったら良かつたと思うんですけど。」まあ、そうしたとしても見た目には大差は無い。

「インパクトと言つ点では、多彩な変化球を見せた淡雪の方がお前よりも上だしな。だから、どうだ。お前だけでも紅白戦に出たら。」「うへん。ま、田端さんがそう言つならやつても良いですけど。花凜も本番では出られない訳ですし。」女子だからな。チーム内での練習はともかく練習試合には出られないだろう。

「まだ、それは分からんぞ。相手チームに申し出て許可して貰えれば川柳も出られる。」

「え? そんな事しても大丈夫なんですか?」

「ああ、あそこのチームの監督はうちの監督と懇意でな。それ位なら多分許してもらえるだろ?」

それは願つたり叶つたりだ。花凜が出られるならオレは出なくとも良い可能性が高くなる。

「だが、確實じゃないからな。もし駄目だった時の為に、お前の信頼度を上げとくに越した事は無いだろ。」

「そうですね。じゃあ、行きます。」

「交代！代打 成沢 春樹。」

相手の投手は一年だ。

何の球種があるかも分からない。

どういう傾向の投球かも確認してない。・・・だが。

オレは右打席に入り、イチローの物真似をして構えた。

「春く〜ん、右打席なのにイチローってなんでなのさ？」花凜が騒ぐ。うるさいな。集中させてくれ。

「アタシも出たいよ！」結局それかよ！大体その呼び方は梨乃の呼び方だろ。

一球目。

相手は普通に振りかぶり、投げてきた。
様子見かアウトローへの変化球だ。

バン。

「ボール。」

少し低かつたな。

良いカーブだ。

二球目。

今度はインハイにストレート。

キン。

わざと掠らせてファール。

そして次。

今度は真ん中だが、球が遅い。

おそらく変化球だ。

バシ。

「ストライク！！」

予想通りカーブ。

これでツーストライクワンボール。

四球目。

アウトコースに来たストレートを、
難なく弾き返す。

センターの深いところだ。

センターに居たチャラ男は走つていつてダイビングキャッチをした
が取れず、体で止めた。
それを見て一塁を回つたが、
バシ。

三塁に球が行つた。・・・良い肩してゐるじゃないか。
それを見て一塁に戻る。

だろ。」

「平井が使えるかどうか試そつと思いまして。」 そう。 平井の守備
能力を試す為にわざとセンターに打つたのだ。
「なるほどな。で、どうなんだ?」 田端さんは興味津々で聞いてく
る。

「何ですか?」

「平井を使うつもりか?」

オレは人差し指を出し口元に当て、

「それは明日のお楽しみです。」 と言つた。

練習終了後。

「田端さん、対戦校のデータとかつてありますか？」

「ああ。もちろんある。スコアを出してやるから、ちゅうと待つてろ。」

そしてたくさんのスコア、そしてDVDが出てきた。

「ありがとうございます。これ、一式借りても良いですか？」

「おひ、好きにしろ。」良い笑顔で言つてくる。ありがたい。

「あ、そういえばマネージャーはどうこに居ますか？練習中姿が見えなかつたんですけど。」

「買出しを頼んだんだ。もうそろそろ帰つて来ると思うだ。」

「なるほどな。それなら居ないのも納得だ。」

「何だ？成沢。早速口説きに行くのか？去年よりも手が速いな。」

「ヤニヤしながら絡んでくる。」

「そんな事しませんよ。それに去年も口説いたりなんかしてません。」

「と言つたが、

「これじゃあせっかく部員達の為にした采配が無駄になりそうだな。嘆くようなポーズをとりながら、そんな事を言つ田端さん。人の話を聞いて欲しい。」

「部員の為にした采配って、何の事ですか？」

「ん？買出しを頼んだ事だが？」

・・・ああ、なるほど。

つまりは、オレから遠ざける為に。

あんなちつこい体の女子マネージャーに買出しを。

しかもかなり長い買い物だから、量もハンパではないだろう。

何か・・・自分のせいだと思うと申し訳ない気持ちになつてくる。

「アイツはな、結構人気があるんだよ。まあ、女子マネなんて大体

そんなモノだけどな。」

何か言つてるが聞こえないフリをする。

いや、もしかしたらあの小さな体に凄まじいパワーを秘めているかも知れないじゃないか。

オレが気に病む必要はないわ。

「そついえば、野球用具運ぶのにも苦労してたな。あんな量頼んで大丈夫だつたかな。」

「失礼します……」「言い残して走り去る。ジャージだから走りやすい。

野球用具だけで苦労するのにそんなたくさん持てるわけが無いじゃないか。

そう思つて走る。

「あーあ、乗せすぎたか。」頭を搔きながら困った顔をする田端。「何してるんですか、キャブテン。」遠くに居た一年生達が尋ねてくる。

「いや、まあちょっと遊ぼうかと思つていたんだが、予想以上の反応が帰つてきたもんでな。」

「？」「よく分からぬといふ顔をする。」

「と云つて、アイツ気づいてるのかな……」独り言のように口をつづけながら田端。

「何がですか？」

「マネージャーが一人じゃ無いって事に。」

校門を出ですぐのところにあるマネージャーを発見する。

・・・・・・・だが。

「そつか、そついえばマネージャーが一人のはず無いいか」口に出してやつと思ひ出す。

ボーッとして立つていると、向こうから気づいた。

「あ、成沢先ぱい、どうしたんですか？」朗らかな笑顔だな。

「ねえねえ、アレ誰？」「ほら、成沢先輩だよ。さうじの。」「あ、あの有名な。」

一年生と思われる他のマネージャーが声を潜めて話している。聞こえてるぞ。

「あ、その～」何と無む印い。またか田端やんとの会話を教える訳に
もいかないし。

この状況で手伝いに来たなんて恥ずかしくて言える訳が無い。

・・・そうだ。

「いや、ちょっと聞きたい事があつてな。」「こりら辺が妥当だらつ。
「え、何ですか？」そんな口で聞かないでくれ。といつか、単純に
何も思い付いてない。

オレが黙っているのをどう取ったのか、
「ほらほら、邪魔しない。」とオレと同じ学年のマネージャーが促

す。

「「ゆうべりね～」何を言つて居るんだ、コイツ。せつと行け。
そつ思つて居ると振り向いて、

「あ、そいつにパクッといかれなによつに氣を付けなよ。」そんな
事を言いやがつた。

全員行つてしまつて、一人きり。

「で、えとえと、その、聞きたい事つて、なんですか？」

う～ん。考えてないんだよな。ちょっと時間稼ぐか。

「その前に。いつから買出しに行つてた？」

「え？あの、SSCに行つて、部長に依頼を受けて貰えると伝えた
直後です。」

という事は練習は全く見てないのか。

「あの、私からもいいですか？」

「別に良いぞ。」時間が余計に稼げる。

「その、今日はどういう練習をしたんですか？」・・・なるほど。

マネージャーなのだから、練習の内容が気になるんだな。

「テストが主かな。守備練習とかして、最後に紅白戦もやつたよ。

「へ～。あ、成沢先輩達も練習したんですか？」

「少しだけな。」・・・よし。有耶無耶に出来そうだ。

「あ、忘れるところでした。あの、聞きたい事つて何ですか？」忘

れてなかつた！－

「え、あ、え～っと、そうだ！その、名前！名前教えてくれるかな。

「苦渋の策。

「え？そんな事ですか？」うわ、怪しんでるよ。だが、言つてしまつたものは最後まで貫き通さないと。

「うん。最初に依頼に来た時に、聞くの忘れてただろう？折角の縁なんだから、名前ぐらい教えて欲しいな」と思つて。「

ヤバイ、絶対変に思われるや！」

居心地の悪い沈黙が続いた後、

「アハハ、そんなにかしこまつて聞く事無いじゃないですか。」と笑いながら言つた。

「私の名前は、岡崎涼子おかざきりょうこですよ。」

・・・良かつた。何とかなつた。

「そうか、じゃあ岡崎。」

「涼で良いですよ。友達は皆そう呼んでます。」うわ、あだ名とか相当恥ずかしい。

「じゃあ、オレも好きに呼んでくれ、涼。」お返しのつもりで言つてみるが、

「ありがとうございます、春先輩。」普通に返されてしまった。まあ良いか。

今日、また一人“トモダチ”が増えたのだから。

「行くぞ、涼。」オレは振り返りそう言ひ。

後ろから振り向いてくる制服姿の涼。

「あ、はい、春先輩。」にこやかに笑う。

ちなみに。直江学園の制服（奨励服）はセーラー服ではなくブレザード。

奨励服は義務ではないから特別な時以外は着る必要が無いのだが、涼は制服を着ている。

オレはジャージだ。（着替えるのが面倒だったから）

何故オレが涼と一人で下校しているかと言つと、

「おお、成沢。まだ帰ってなかつたのか。他の奴らはもう先に行つたぞ。」と、田端さんが言つたからだ。

・・・・・置いて行くなよ。

そう思つて肩を落としていたオレに、涼が

「先輩、色々と話、聞かせてくれませんか？今日の練習の事とか、気になります！――

と言つたので、じゃあ帰しながら、と言つ話になつたのだ。

以上、回想終了。

「で、先輩。さつきよりも詳しく教えてください。」

「と言つても、あんまり大した事してないぞ。練習して、紅白戦して。あ、そういえば。」

「何ですか？」目をキラキラさせて聞いてくる。

「いや、テストが終わつた時にな、平井が絡んできたんだよ。お前は野球出来るのか、って。それで一打席勝負つて事で戦つたんだ。」

「それで、どうなったんですか？」

「一打席田はオレが勝つて。でも一打席じゃ分からない、って言つたから四打席勝負になつたんだけど、うちの・・・分かるかな、氷河と花凜も投げるつて言つて残り三打席は一人一打席投げる事になつたんだ。けど結局、四打席勝負は全部オレ達が勝つたよ。」

「え、平井君が四打席で一回も打てなかつたんですか！？やっぱりSSSCは凄いんですね！！」興奮気味に言つ。

「あ、やっぱり平井つて上手いのか？」

「ええ、多分一年の中で一番上手いんじゃないでしょうか。」

「へえ、やつぱりそつうなのか。」なら平井に勝つたのは効果があるだろう。

「凄いな～川柳先輩つて野球も出来るのか～私とは大違いだな。」

「へえ、花凜のことは知つてているのか。まあ、花凜は有名だからな。

主にスポーツ方面で。

「涼は野球した事ないのか？好きなんだろ？」

「確かに好きなんですけど、私、運動神経無いから。」

「ふうん、そうなのか。あ、話飛ぶけど、家つてどつち方向？」

校門前に着いた。

我が直江学園の前は道が三つに分かれているので、家が反対方向なら分かれる事になつてしまつ・・・まあ今日はそんなつもりは無い。もし反対方向だつたとしてもある程度までは送るつもりだ。

「こっちです。」言つて指差した方向はオレと同じ方向だつた。

「そうか、お前も西側なんだな。」

「？お前も、つて事は先輩もですか？」

「ああ、オレもそつちだ。」

「良かつた～」安堵の表情を浮かべる。

「良かつた、つて何がだ？」

「だつて逆方向だつたらもうこいつでお別れだつたじゃないですか。」

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・何か、逆に新鮮だな。

氷河なんかは一応家が東側だから、（オレがイヤだといつても強引に）よく荷物を取りに付いて行かされるんだが。

まあ、これが本当は普通なんだろう。

「別に反対側でも今日はちゃんと送るつもりだったさ。涼がもう良いくらいで言つまでだけじ。」

「あ、そりなんですか。でも嬉しいなあ。」

本当に嬉しそうだ。だけど、そんなに嬉しいものか？まあ、なんとなくは分かるが、遠くてもあんまり問題は無いと思うんだが。

「あ、そういうえば聞きたい事があつたんですけど、良いですか？」

「どうした？答えられる範囲なら答えるぞ。」内容にもよるけど。

「その、去年の野球部を助つ人した時の話を教えてください。」

「え？それが聞きたいか？」なんか予想と違つたが、まあ良い。

「はい、良ければ是非、教えてください！？」

・・・

・・・・・まあ、良いか。

実は、ほとんど覚えてないんだけど。

「あれはな・・・・・」

Request : 1 帰り際 part : 2 (前書き)

いつも、三週間ぶりです。

色々あって更新出来ませんでしたが、ようやく更新再開です。

更新してなかつた間いつも見に来てくださいた方々、ありがとうございます。

これからは以前よりも頑張りたいと思います。

Request : 1 帰り際 part : 2

「あれは、去年の9月くらいだったな。その頃にSSSCを結成したんだけど、最初は全然人が来なかつたんだ。それでどうやつたら依頼する人が来るかを考えたら、とりあえず実績を作ろうつて事になつた。それでメジャーな野球部に無理矢理依頼をねじ込んだんだ。」

思い出しながら語る。

涼は黙つて聞いている。・・・出来れば相槌くらゐは欲しいが、まあ良い。

「後は今回と同じ。今回と違うのは、去年の依頼はもつと時間があつたつてことだな。」

「どれくらい時間があつたんですか？」

「確かに三週間くらいだつたかな。だからしつかり準備も出来た。今では準備期間三週間なんて考えられない。割と頻繁に依頼が入つてくるので、一つの依頼に三週間もかけたら依頼が全てはこなせなくなつてしまふのだ。・・・まあ、今回のように本番まで一日と言つうのも珍しいが。

「その間何かトラブルとか無かつたんですか？」

「ん、それ聞くか？あんまり面白い話じゃないんだけど。」

「それでも良いです！」

「え～っと、基本的には今回の平井の事と同じだよ。オレ達は野球出来るのか、つて。それで戦うことになつたんだ。」

「それは誰が言つたんですか？私の知らない人ですか？」

「田端さんだよ。今でこそ友好的だけど、最初は目の敵にされてたんだぞ。・・・つと。」

自販機が見える。・・・そういうえば喉乾いたな。

「なあ涼、喉乾いてないか？」

「え？え～っと、少し。」急に話題が変わつて驚いたのか一瞬怪訝な顔をして答える。

「そりが、じやあ何飲みたい？」財布を取り出しながら自販機の前で立ち止まる。

「あ、イヤ、悪いですよ、そんな。」・・・・・別に遠慮する」と無いのに。

「良いんだよ、遠慮しなくても。」

「イヤ、でも・・・」

財布をカバンから取り出そうとしているのを手で制して、

「友達とは言え下級生なんだから、奢られても良いじゃないか。取りあえず奢られとけよ、後で金取つたりしないから。で、何が良い

?」と聞いた。

涼はしばらく躊躇ためらつていたが、やがて観念したようにいつづいた。

「じゃあ、ミルクティーをお願いします・・・。」

オレ達はミルクティーを飲みながら歩いている。

「・・・というわけでその時の依頼をこなして、少しずつ依頼が増えて今の状態になつたんだ。」

「へ～そなんですか。あのキヤプテンが最初は友好的じゃないたなんて・・・全く想像がつかないです。あんなに朗らかで優しいのに。」

「まあ、普通の人はそういう反応するだろ。だつて急に出てきて助つ人するなんて言つても、得体の知れない奴に任せたくないだろ。オレも逆の立場なら無視するさ。」

「そんな物ですかねえ・・・。」

他愛も無い会話を続けていると、商店街が見えてきた。

オレの家は商店街の少し向こうなのでもうすぐ家に着く。

「涼の家つてどちら辺にあるんだ? ここから遠いのか? 「

「商店街を抜けて右に曲がったすぐのところです。」

「え? それじゃオレの家の近くじゃないか。」

「そりなんですか? でも、あの辺り私の住んでるところ以外アパー

ト無いんですけど・・・・・ハル先輩って確か一人暮らしだしたよね?・・・・・もしかして同じアパートとかですか!!

「イヤ、同じアパートは絶対に無い。・・・つていうか何でオレが

一人暮らしだって知ってるんだ?言つてないよな?」

「だつてSSCメンバーは良く噂されてますからね。誰がどういう状況かなんてある程度はすぐにわかつちゃいますよ。」

「なんだつて?そんな理不尽な状況にオレは置かれていたのか・・・

何てことだ、オレのプライベートが・・・・。」

「まあまあ、気を落とさずに。それに、全部完璧に分かつてるつて訳でも、全部本当だつて訳でも無いですよ。だつて、噂だと春先輩、昔不良グループを一人で潰した、つて事になつてるんですよ?だから、今日SSCに依頼に行くの怖かつたんですから。まあ、実際に会つたら全然怖い人じやなくて良かつたんですけど。」

「・・・・・

「?どうしたんですか?春先輩?」

「・・・・・その噂、多分実話です。

「い、いやあ、何でもないぞ、アハハハハ。」乾いた笑みで返す。

「何か冷や汗かいてませんか?」

「い、いやあ、気のせいだよ、アハハハハ。」ツ、ツライ。

「その割には、さつきから妙に片言ですけど。」

「い、いやあ、そんなことは無いぞ、アハハハハ。」純粹な目が今

のオレにはツラすぎる!!!

「?なら良いんですけど。」た、助かった・・・・。

まあ、ただ結果がそうだったというだけで。実際は空手の試合に勝つたらそいつがボスで、オレに次のボスを継がせるから好きにしろつて言われたから解散させただけ・・・・なんか今思い出すとマンガみたいな話だな。

「それで、何で絶対に違うんですか?」

「え、何が。」

「だから、アパートですよ。だつて、一人暮らしならアパートか

マンションですよね。だけど、私の住んでるところ以外はアパートもマンションも近くにないですよ。」

「まあ、その理由は家に着いたら分かるや。近くなんだし見ていくだろ?」

「はい、見たいです。という事で、急ぎましょ!」

オレ達は商店街を駆け抜けた。

Request : 1 帰り際 part : 3 (前書き)

久しぶりの投稿です。

お待たせさせてしまつている方々には大変申し訳なく思つてます。

では、どうぞお楽しみください・・・

「え、なんですか、これ。」涼は目を白黒させている。

「何つて、オレの家だけど?」本当は笑つてやりたいところだが、敢えて平静を装つて言い返す。

「・・・だつてこれ、本当の“家”じゃないですかーー」・・・・・
そうなのだ。

オレの住んでいる場所が涼と同じアパートでは無い理由は、一つ。
・・・・・オレの住んでいるのは“家”なのだ。
しかも、普通の家ではなくこれは最早豪邸もはやと呼んでも良いだらう。堀と柵に囲まれそびえ立つ三階建ての建物は、来訪者に対して威圧感を持つているように見える。

・・・・そりや、初めて見たら驚くよなあ。

これまでに来た奴も初めて見た時は驚いていたからな。

「しかも、ここって近所でも有名なお金持ちが住んでるって噂の屋敷ですよ?」・・そんな噂があったのか。

「ま、そんな細かい事は気にせず。わざわざ入らねば。」

玄関を開ける、と同時に

「あ、お帰りなさい。」そんな声が聞こえてきたので、言葉を返そうとする

・・・・・ナンデスカコレハ?

何故か玄関にはエプロンを着た梨乃と花凜。
しかも、

・・・あれ？まさかのHプロンオングー？

「オジヤマシマシター」そう言って固まっている涼の手を引いて出て行こうとする。

うん、これはきっと悪い夢だな。

何かして時間を潰そう。

ガシッ。・・・掴まれた。

「あれ～？春ほん？せっかく女の子一人が水着にHプロンでお出迎えしててのに反応が無いぞ？」

あ、良かつた、水着も着てるか。・・・あれ？皆なんだい？その田は。まさかオレががっかりしてるとでも？

・・・や、やだなあそんな訳無いじゃないか。

え？あれ？な、なにその人を蔑む様な目は？だ、だからがっかりなんかしてn a (r y

「こきなりすぎだろ！大体迎えるのにそんな格好をする必要は無い！」

「ちよ、ちょっと凛ちゃん、言つてた反応と違つよ～？やつぱり喜ばないじやない！」

「いや～これはきっと照れ隠しだよ？本当は飛び上がりたいくらい嬉しいんじやないかな。」

「そ、そんな訳ないだろ。と、とにかく服を着りよ。」

「ほら、普段は滑舌が良いのにメチャクチャ詰まつてるじやん。」

・・・・う、確かに田のやり場には困るけどさ。

「ほ、ほら、後輩も居るんだからそんな格好でうひぢょひするなつて。」

涼を盾に使う事を思いついた。よし、冴えてるぞ、オレ。

「あれ～？いたの？え～っと、岡崎さん、だよね？」

今気付いたかのように言つ梨乃。・・・・・おそらくの一人は本

氣で気付いていなかつたに違いない。

「あ、はい。おじゃまします。」金縛りが解け、二人に挨拶する涼。手で示して一人を着替えに行かせる。・・・よし、これでもう大丈夫だな。

「あ、あの、春先輩？何でここに川柳先輩と立川先輩が？」涼が急に聞いてきた。

「え？ここに住んでるからだけど？」

「え、い、今、なんて言いました？」・・・何を慌てるんだ、涼は。

「だから、俺達はここに住んでるんだけど？」

「へ？え、あの～、その・・・」

何故か黙ってしまった。・・・おかしいな？そんなに変な事言つたか？

「どうよりも、情報が出回つてゐなら俺達が一緒に住んでる事ぐら いすぐに分かるんじやないか？
・・・あれ？すごい顔真っ赤にして俯いてるぞ？」

黙つてしまつて、居心地が悪い空氣になつてしまつた。
「おい、成沢。早く上がりつて來い。する事なんていくらでもあるんだぞ。」部屋から出てきた氷河が言つてくる。
「え？・・・なんで、淡雪先輩も居るんですか？」不思議そつた表情で聞く。

「や、せつから言つてるだろ？ここに住んでるんだつて。」

「・・・え、だつてここは三人の愛の巣だつて言つてたじやないですか！」

「そんな事一言も言つてないぞ！『俺達は』つて言つたじやないか。」「どんな勘違いだよ！－
「え～つと、すると、どういう事になるんですか？」

「つまり、この家はSSCメンバーが住んでるんだよ。」まあ、正確には少し違うのだが、大体合ってるからいいか。
今日一番の驚きを見せる、涼の顔が印象に残った。

Request : 1 成沢家?の食卓・・・? (前書き)

またしばらく更新が止まつっていました
本当にすいません
これからは頑張ります

・・・・最近これがセットになつた気がします

Request : 1 成沢家？の食卓・・・？

「醤油取ってくれ、梨乃。」

「はい。お醤油だよ、ハル君。」

「サンキュー。」

フライパンに醤油を入れていく。

特売で買った無駄にでかい業務用のモノだから、分量を間違えないように気を付ける。

ジユウ～。

良い音を立てて肉が焼けていく。

「あの～、何をしてるんですか？」涼が不思議そうに聞いてくる。

「何つて、しうが焼きだけど？」

「あ、そうですか、美味しそうですね・・・つてそうじゃなくて、なんで料理してるんですか？」

「いや、腹減ったしもうすぐメシの時間だしな。」

「そうですか・・・」

ん？何で俯いてるんだ？良くなからん。

「じゃあ、私はそろそろ帰りますね。」

「え？何でだよ、食つてかないのか？」

「え？え？ど、どういうことですか？もう（）飯にするんですけどよね？」

「だったら、私が居たら邪魔じゃないですか。」

「そんな事ないよ～。私達は涼子ちゃんと一緒に食べたいよ～。」

うわ、出たキラキラ光線。この田で頼むのは反則だよ。

「どうか。今気付いたけど梨乃と涼つて似てないか？・・・いや、特にどこが、つて訳じやないけど、なんか雰囲気とか。

まあ、そんな事は置いといて。

「そうだぞ、邪魔なんてありえないだろ。涼も一緒に食おつぜ。それに、大勢の方が美味いって言つだろ。」

「春先輩達がそう言って下さるなら、遠慮なく。」と、言葉とは裏

腹に遠慮がちに呟ついた。

「あれ、あれ～？ 何だらうね～？」

「何がだよ、花凜。」急に出てきて、面倒くさい奴だ。

「イヤ～？ なんで一人がそんなに仲良くなつたのかな～って思つてや。」ニヤニヤ・・・否、ニヨニヨした表情で呟つ花凜。

「は？ 何言つてるんだ、お前は。本格的に頭がおかしくなつたか？ どうしてそう思うんだよ。」

「だつてさ、な～んか知らなこいつに『春先輩』、『涼』つて呼び合つてるじやんかよ～。」

「は？ それが何だよ、別に普通だわ、それぐらい。」・・・オレも本心ではあんまり普通じゃないと思つてるけど、それは敢えて棚上げだ。

「そつかな～？ そだつたかな～？ で、そことのこりびつな、涼ちゃん。」

うわ～メチャクチャニヤニヤしてやがる・・・。

「へ？ あ、イヤ、あの、その・・・。」

「ちょ、ちょつと止めてあげようよ、リンちゃん。」梨乃が止めて入る。

「もひ、かつたい（固い）なー、梨乃ちゃんは。別に良いじやんこれくらー。・・・で、どうこいつことなのかな～？」

「別に大した事じやなこさ、友達なんだから堅苦しく呼ばなくても良いつて言つただけだよ。」

オロオロしている梨乃の代わりに答える。

楽しそうにしている花凜には悪いが友達である下級生の女子がいじられているのを黙つて見過しすわけにはいかない。

・・・・・まあ、正直なこひ。このままどんどんテンションが上がつてしまい、こちら側にも被害が拡大するのを防ぐためという理由もあるにはあるが。

「そんな事が通用するとでも思つてゐるのかい？ 『春先輩』。」

「通用するも何も、それが眞実なんだからしうがないだろ。それ

以上の理由は無いし、それ以外の事情も無い。これが全ての真実だよ。」

「ふ～ん、そうなのか～。へ～、そなんだな～。」つまらなそう。

・・否、むしろ感情がこもっていない棒読みでそんな事を言つ。言いやがる。

・・・こいつのこの反応は、全然信じてないな。まあ、どうでもいいけど。

「あ、そうだ。私達もハル君みたいに名前で呼んで良いかな?」にこやかに笑いかけながら言う梨乃。

「え、あ、どうぞ。名前でも何でも、好きなように呼んで下さい。」

「ありがとう。じゃあ、これからよろしくね。リョウちゃん。」田を合わせてから、涼がこちらに向ひよろしくと言つ。・・・そしてすぐ花凛も、

「アタシもよろしくね、涼たん。」

「りょ、涼たん、ですか・・・?」何でも好きなように呼べと言つたものの、さすがにこれは予想外だつたのだろう。とこりうか、涼たんつて。どこの萌えキャラだよ。

「ん? 駄目かな? じゃあ別の呼び方でも良いよ?」

「あ、イヤ、別にその呼び方で良いですよ。」

「それと、アタシ達の事も名前で呼んで欲しいかな。『春先輩』みたいにさ。」

「あ、分かりました。じゃあ・・・『凛先輩』『梨乃先輩』って呼びますね。」

こうして。

オレ達SSCメンバーと涼は

「オイ、誰がSSCメンバーだ? 僕と西園寺がいないのにそんな事を言つのは感心しないな。」

部屋に入つてきなり遮られた。

・・・頼むからモノローグに突つ込みを入れないでくれ、氷河。後、多分氣のせいだけどなんか久しづりだな・・・そして相変わら

ずのクールっぷりだ。

「良いじゃないかそんな些細なこと。大体健太は家の中にすら居ないじゃないか。ただでさえ出番が少ないのに、こんなことじや皆に忘れ去られるぞ。」これはお前にも当てはまる事だけだ。

「アイツは今ロードワーク中だよ。・・・そんな事より、」

健太のことはそんな事呼ばわりか。

「早く食事を取つて上がって来い。ＤＶＤの確認するんだろ。」

「ああ、そうだったな。よし、メシを・・・」

「そりゃ、さつきから少しだけ焦げ臭いんだが、これはどうい

う事だ？」

全員がフライパンを見た。

・・・・そこには、黒く焦げた何かが入っていた。

「悪いな、こんなメシで。」苦笑しつつやつと呟つ。

「いえ、お邪魔してゐるにわがままは言えませんよ。」

「・・・本当にゴメンね~リョウさやん。私がちやんと見つれば・・・」

「イヤイヤ、悪くないよ梨乃リン。皆が話に夢中で氣付かなかつたんだから。」

花凜がまともなフォローをしてくる・・・珍しい。

結局。

しうが焼きは黒コゲで食べられしうは無かつたので他の物を作つたのだが、元々一日分の食料はしうが焼киで何とかする予定だつたので冷蔵庫にほとんど物が無かつたのだ。

在つたのは朝食に使えそうな、食パン、卵、ワインナー、ベーコン、トマト、キュウリ、その他の野菜だけだつた。

ムレツ、と玉子だらけだ。

「ちょっと、ハル君。他にもワインナーとかもあるでしょ。」

「・・・そついえば、お前はオレの心が読めるとかいうチート設定だつたな、忘れてたよ。」

つと、今の突つ込みに涼が首を傾げているぞ。

「梨乃、涼が不思議がるから変な事言つくなよ。」

「だ、だつてハル君がちゃんと全部言わないんだもん。そんな言い方じや『何でベーコンとかもあるのにそんなに偏つてゐの?』って皆が思つじやない。」

「良いだろ、別に。といつか、それを狙つてたのにぶち壊さないでくれよ。」

「え? そうだったの? あの、ゴメンね。」

くそ、この小説史上初の叙述トリックを使おうと思つていたのに…

・・・え？何？これは叙述トリックつて言わない？

・・・まあ、またの機会にしよう。

「イヤ、別に良いけど…・そういえば、さつわと食わないといけないな。」

「そうだよ、ハル君。ヒヨウ君が待ってるんだから速くしよ？」

オレは黙つてメシを食べる。気分的にはフードファイターだ。

・・・

・・・・・

「あ～、やつと食い終わつた～」

「ほらほら、速く行きなよつ！氷んが待つてゐよつー！」相変わらずの歯切れのよさでそう言つ花凜。

「氷ん！？それ何つて読むんだよ！？」初めて見たぞ。

「『こおりん』だよ、ほら早く行かないと。」

分かつてるよ、と言つて一階に上がる…・・・そういえば、何か重大な見落としを…

「涼たんの事は任せてね～！たつぱり可愛がつとくか～。」

・・・・・し、しまつた～～！！

涼と花凜を一人にさせたら　　梨乃もいるな　　大丈夫な
のか？

・・・・・まあ、良いか。

涼も何かあの二人から学べる事もあるだらつ…・・・花凜、お手柔らかに頼む。

そして梨乃。

お前はどうにかして涼を魔の手から…・・・無理だな、うん。
まあ、ほどほどに頑張ってくれ。

「一・二・三・四・五、じゃあそろそろ始めましょうか。」

食器を片付け終わって、花凜が一言。

「え? 何を始めるの?」

「そりや、ねえ・・・涼たんの事を知るための楽しい楽しいお話だよ。」

「一・二・三・四しながら、手をワキワキさせながら言ひ花凜。

「え、あ、へ? わ、私・・・ですか?」

「そ・う・だ・よ。という訳で、第一回涼たんの・・・何してんの、梨乃。」変な愛称をつける事を忘れるほどに疑問に満ち溢れながら尋ねる花凜。

「え? 何つて、リョウちゃんを魔の手から守つてるんだよ?」

「・・・何でそんな事してるのさ?」

「だつて、ハル君に頼まれたんだもん!..」

「え? 何を言つてんの? 梨乃たん?」

「だから、リョウちゃんを守つてくれつて頼まれたんだよ~」

「・・・梨乃ほん、せつとそれは氣のせいが、耳の錯覚だよ? だ・か・ら、そんなの気にせずに行こうよ。」

「え? そんな事無いと思つたんだな~。・・・でもまあ、

良いかな。分かつたよ、リンちゃん、気にしないようにするよ。」

「そうだよ、それが良いよ。・・・それでは第一回涼たんの事をもつとよく知ろう大会!...」

「え、あ、あの~、それは一体何をするんですか?」戸惑いながら聞く。

「ん? ひたすら喋るだけだけど? .. それでは始めましょう。いきなり質問ターキムツ!..」

「じゃあ、まずは私からね。リョウちゃん、何年何組?」「え~っと、本校の1年B組です。」

「身長を教えて、涼たん。」

「た、たしか155cmだったと思います。」「好きな食べ物は何なのかな?」

「え、あ、ううんと、プリンですかね。」「体重何キロある?涼たん、軽そうだけど。」

「え、え~っと「見ないで~!!」ですね。」「どこに住んでるの?」「そこアパートです。」

「涼たん、胸大きいね~!!何力アップ?」「

「え?そ、それは・・・」「残念ながらこの部分はお見せできません」「くらいですけど・・・あの、何で凛先輩は身体的な事ばかり質問するんですか?」「

「え?まあ、良いじやん、良いじやん。さて、ではその大きな胸をドダダダダダダッ!!!」

階段を駆け下りてくる音が聞こえる。

「な、何か今オレの後輩の身に何か危険が差し迫った気がしたんだが、何かあったか?」

「へ?何の事だい?春樹くん!!何も無かつたよ~!~?」「『くん』を強調する花凜。

「お前がその呼び方をするといつ事は絶対何かあつたんだな。よく分かるぞ。」

「そ~んな事無いよ!!ね~涼子ちゃん!~!~必死に語りかける花凜。

「え、あの、はい。何も無かつたですよ、春先輩。」「

「う~ん、どうか?まあ、涼がそう言つなら別に良いんだけど・・・」「春先輩、わざわざ私のために降りて来て下さってありがとうございます。大丈夫ですから、試合のデータの確認を続けて下さい。」

「あ、ああ。じゃあ、戻るけど、何かあつたらすぐに呼ぶんだぞ?」「..

「はい、分かりました。」

トントントン、と階段を上がつていった。

「ふ～、危なかつた～春ちゃんのああいつ時は怖いかりひね」

「そうだね～、あの状態になつたら説教長いもんね～」

「ところで、涼たん。春ちゃんの事じつ思つてゐるへ～」いきなり質問

を繰り出す花凜。

「え？あ、その、凄いな～とか、噂と違つて優しいな～とか、ですかね。」

「ふ～ん。じゃあ、もし春ちゃんが喜ぶ事があるつて言つたら、それをやつてみる？」

「え、何ですか？それ、是非教えてください～～～」

「そうだね、じゃあ・・・・・・」

Request: 1 SUCUの食卓（後書き）

感想を・・・下せー・・・

誤字・脱字・読めない漢字・矛盾点などあつまいたら教えてください

い

Request : 1 データ入力・・（前書き）

何か本当に久しぶりのような気がします
10月の忙しさは異常だな、うん
ではううし、お楽しみ下さい・・・

Request : 1 データ入力・・

背中に悪寒が走った。

「・・・・・」

「どうしたんだ、成沢。休んでないで打ち込め」

「ああ、悪いな氷河。何か良く分からぬけど嫌な予感がしてな」「・・・・・そうか、それは『愁傷様だ』残念そうな顔で静かに目を瞑る氷河。

「何が『愁傷様なんだよ、ただ予感がしただけだぞ』

「経験上お前の予感は良く当たるからな。どうせ何か余計な事をしている奴がいるんだろう」

「・・・おそらくだがそれは確實に花凛だらう。

「ま、さつさと作業を終わらせようぜ」

「中断していたのはお前のせいだらうが・・・」

今まで。

オレ達はスコア・DVDの確認作業をしていた。

とは言つても、ほとんどはオレが来るまでに氷河によつて確認済みだ。

したがつて、今現在オレ達がしているのはデータの確認ではない。

「あく、手と目が疲れる。久しぶりだと結構キツいんだな」

「つべこべ言う暇があつたらさつさと打ち込め。人数が多いから一人だと大変なんだ」

「・・・・・オレ達はデータの打ち込みをしている。

スコアとDVD、今日のテストの結果のデータを打ち込んで試合のシミュレーションを行うためだ。

「あくもうちよつとで終わる~」

「まだ終わっていないだろ、手を緩めるんじゃない」

「はいはい。んじゃ、やつれと終わらせりやがなつか」

黙つて打ち込む。

打ち込む。

打つ。

打鍵する。

Hitする。

「お、終わった・・・」

「何を言つてるんだ、これからが本番だらつ」氷河は叫びつ。

そづ。

データの入力をして終わり、では無い。

むしろここからが重要だ。

試合のシミュレーション。

相手校の戦力と、ウチの戦力。

それらのデータを解読、解析し試合のシミュレーションを行つ。

しかし。

「でもさ、別に張り付いて見てる必要無くね？最後に結果だけ確認すればさ」

「何を考えているんだ、成沢。何のためにパワプロ方式にして見やすくしたと思つていいんだ」

「いや知らねえよ！別に頼んだ覚えないし、オレは他にもやる事あんだけよ！――」

「それは一体何だ？どうせ下に降りて岡崎達の相手をするぐらいだらう」

・・・・・クッ、図星だ・・・

「悪い事は言わないから、止めておけ。・・・・・少なくとも今はな

なんだ？少なくとも今は？え、今降りたら何か駄目な事があるのか？

イヤイヤ、そんな事ねーだろ・・・でも、氷河の顔は真剣そのもの
だし・・・

「黙るなよ、成沢。とにかく今は試合の確認だ」

「へいへい」

ま、深く考えるのは止めにしてよ。

「え~っと、これで・・・何対何だったつけ?」

「これで67勝43敗だな」

「あ~、そうだったな。・・・この結果なら普通に勝てるんじ
やないか?」

「そんなわけがあるか、成沢。何処に目をつけているんだ」

「え、いやだつて、この結果なら約7割の勝率じゃないか」

「良く考えて、成沢。このデータには重要な欠陥がある」

「ああ、それはあれだろ?相手のチームは一年生のデータが無いつ
て事だろ?」

今年度になつてからまだあまり経つていながら、対戦もしてなく
てデータが無い。

「でもそれは、あんまり重要じゃないだろ?即戦力が入つてなかつ
たら影響が出ないじゃないか」

「お前はバカか。それもデータの欠落だが、それよりも重要な要素
があるだろ」

「・・・・分からん。全然分からん」

「少しば考えようとしる。・・まあいい、教えてやるが。それはな、ウチの野球部のHースがデータに入ってる」とだ

・・・ああ、なるほど。

試合に出れない奴がデータに入ってる、と皿ひ事は しかもそれがエースならば 大きくデータが狂つてしまつだろう。

「なんでわざわざデータ入れたんだよ」面倒くさくなるじゃねーか。

「入れたんじやない。入つてたんだ」

「は? 何だよそれ。何で入つてるなんて事があるんだよ」

「良いか、僕達は以前にも依頼を受けただろう? その時も同じようになしたじやないか」

「イヤ、知らねえよ? その時お前のやじはるの家に無かつたじやないか」

「・・・・そういうえば、そんな氣もするな」

「そんな気もするな、じゃねえよ! ちゃんと説明しとか」

「説明・・・ねえ。してもあまり意味が無いと思つがな

ぐ、確かに。」

「・・・・はあ、まあ良いや。で、どうするんだよ」

「(・・・そろそろ頃合か) おい成沢、ここはもう良じから下に降りろ」

「は? 何でだよ、まだ作業は終わってないじゃないか」

「良じから降りろ。・・・おつと、下に降りたら準備しつけよ。それと、ホラ」

紙の束を差し出してきた。

「準備は分かつたけど、この紙は何だ?」

「は〜、中身を見たらすぐに分かるだろうが。せめて見る仕草をしてから言えよ。・・・それは一人一人のデータと試合のスタメン案だ」

中をパラパラ捲ると、確かにそんな感じだった。

「分かった、確認しとく・・・よ?」

あれ？ 良く考えたらこいつこれを作ったんだ？

・・・おかしくね？

オレが来てからそんな作業はしていない、
とこう事は。

「おい氷河、お前いつこれを作った？」

「お前が来る前だが？・・・ああ、言つておくがお前の作業は無駄
じゃないぞ」

え？ そうなのか？

「当たり前だ。やはりシミコレーションをするのとしないのでは大
きく違つ

・・・まあ、そういう事なら仕方ない・・・のか？

「成沢、そんな事はどうでも良い。素早く降りろ」

「はいはい、分かつてますよ」

そう言つてから。

部屋を出て、階段を駆け降りた。

Request : 1 データ入力・・（後書き）

ある作品を読んでいたらですね、後書きのページで感想書いてくれた人に感謝を述べていたんですね

・・・でね、真似しようかと思いまして

これからは感想に対しても反応したいと思います

・・・と書つわけで、一ヶ月前ですけど

タムらんさん感想ありがとうございます！

感想があるとやる気が出ますね、これからもよろしくお願いします

か、感想をくれ〜〜〜！
以上、後書きでした

Request:1 一階の惨状（前書き）

どうも、お久しぶりです

・・・・また一週間空いてしまった・・・・

いや、僕も頑張ってはいるんですよ？

でもね、いかんせんタイミングが・・・・（泣）

さて、前フリはこれぐらじにしどいて、本編どうぞ～

Request: 1 一階の惨状

氷河・・・

お前、分かつてたな・・・
一階がこんな有様になつてゐる事に・・・
「何だ、これは？」

そこには衣類 正確にはナース服やメイド服など
していた。
が散乱

「全く、何やつてんだあいつらは」

溜息を吐きながら拾つていく。

何やつてるんだ、とは言つたがおおよそ予想はつく。
おそらく・・・

「（ほれほれ、涼たん。春樹つちが来たよ～早く出なん？何か隣の部屋から声が聞こえるが・・・どうしちゃう。）

A・扉を開ける

B・そつと中の様子を伺う

C・むしろ大声で呼びかけてみる

何だよ、この選択肢！！

ろくなのが無いじゃないか！！！

というか、これ結果的にはほとんど同じじゃねーか！！

最早選択肢の意味を成してねーよ、これ！！

自問自答していると、後ろで扉が開いた。

「あの～春先輩？どうして頭を抱えているんですか？」

「ああ、イヤ別に大した事じゃない」と言つて振り返ると、ナンデ
スカコレハ？

おっと、一時間ほど前の事を思い出しました。
デジャブってヤツだな。

でもさ？ 今回はちょっと破壊力が違うよ？

「…………涼？何でそんな格好をしてこるので」それこましょうか

?

焦りすぎて口調が変になつちまつたじやねーか。
まあ、それもそのはず。

まあ、それもそのはず

梨乃や花凜は良く見慣れてるけど、涼がそういう格好をするなんて想像もしてなかつたんだからな。

しかも

マニアック騒ぎあざらうが!!!

「それはもう、春ちゃんの好みに合わせたんだよー。」部屋から出

てきて、言ひつ花凜。やつぱりコイツの仕業か。

「叶がたまに舞ふ事あらば、」といひかへり、「おまえの娘が、おまえの娘が、」

耶穌は「おまえが死んでから三日後には起つておる」と語つてたのさ。

それに、某怪異が登場する小説およびアニメと同じくだりだよ、こ

「とりあえず涼。何か上に羽織つたらどうだ？」出来る限り心を落

「あれあれ、アガつゝ
ち着かせ」冷静に言ふ

あれあれ、どうしたのかな？口愛い口愛い後輩が春一がのためにこんな格好してくれてゐるのに感想は無いのかな？」

「オレのために、を強調しそぎだろ。
「ど、どうでも良いだろそんな事。ほら、やつせとこれ着ろ」とい
つてそこら辺に落ちていたパーカーを差し出す。

アレ? 何か俯いてるよ? オ、オレ何かしたか?
と思つた矢先、突然顔を上げ、

「ジーツ」

うつ。か弱い小動物の様な目でこっちを見てくる・・・。

「ジーッ」

・・・・・耐える、耐えるんだオレ。

「ジーッ」

・・・・・もうムリ。

これはもつ言つしか無いのか？

でも、何で言うんだ？『似合つてゐよ』か？それとも『可愛いよ』
ぐらには言つた方が良いのか？

・・・クソ、オレの経験値が足りないからベストなチョイスが分か
らない！！

迷つた末に、オレの選んだ答えは・・・・・

「え～っと、その、あの・・・も、萌えるよ」

つて何でだ～～～！！！！

いくら何でもそのチョイスは無いだろ！！

よつにもよつてなんでそれを選んじまうんだよ、オレの脳細胞！！

！

しかも萌えるつて！！今日出来たばかりの友達になんて事言つてん
だ、オレ！！！

これでオレの評価ガタ落ちになるじゃねーか、チクシヨー！！！
と、思つたけど。

・・・・何が、頬を赤らめてますけど？

もしかして、これが正解だつたのか？

そう考えていると、オレの手からパークーを受け取つてこいやかに
笑い、そして。

「ありがとうございます、春先輩」良い笑顔で言い切つた。

「これで春樹つちは喜ぶよつ」

「い、これですか？」花凜が持ってきたのは色々な衣装。

「うわ～相変わらずたくさん有るね～。いつも思つただけどじつてこいつの持つてるの？」

「ま、そんなことは気にしてないの。ほら涼々^{ひょうりょうりょう}、好きなの選びなよ」

「そ、そんなすぐには決められませんよ」その言葉に花凜はニヤリと笑つて、

「だつたらひさ～、ひとりえず片^{かた}つ端から着てみよう～」

「え、え～～～～」・・・その叫び声は一階には届かなかつた。

「これも似合^{あつ}うけどな～ダメかなつ？」
「駄目^{だめ}とこつか、その。は、恥ずかしいです」
「それもそうだ。

今花凜が示しているのは露出部分が圧倒的に多く、最早服とこつりも下着に近い代物なのだ。

「そつか～、残念」さほど残念そうでも無く、服をしまつ。まあ、

一回着せたから満足したのだろう。

「あ、そうだ涼たん。一つ言つておく事があつたよ」急に何かを思
い出す花凜。

「え、な、何ですか？」

「あのね、春君はプライド高いから、自分が気に入った事もあまり褒めないのさ。だから、多分最初は適当に誤魔化すと思つんだけど、そこで諦めちやダメだねつ」

「ぐ、具体的にはどうすれば良いんですか？」

「そうだね～、潤んだ瞳で見上げて、春樹つちが何か言つまで待つ
てるのが良いんぢやないかなつ」

「う、潤んだ瞳、ですか・・・？」少し躊躇しながらも尋ねる涼。

「そうそう、そうしてればきっと何か言ってくれるさつ。でもね、
そこでも誤魔化す可能性はあるんだよね～。だから、ひやんと言つ

てくれるまで続けるんだよ？」

「は、はい。分かりました凜先輩」

「（まあ、たぶん春つちの事だからすぐ口に言ひだらうが）」これ
は今までツルんできた経験から来る直感だ。

「え？ 何か言いましたか？」

「え、ああ。あのね、春たんが言つた言葉で、どれだけツボにはま
つたかが分かるよ」

「そうだね～、多分ハル君なら『可愛いよ～』ぐらいは言つてくれ
るんじゃないかな？」着終わつた物を片付けていた梨乃が会話に参
加してきた。

「梨乃りん？ それ、間違つてはないけどアタシの予想とはちよつと
違うね」

「え～？ ジャあ、どう言つの？」

「そうだね～、普通に似合つてるなら『似合つてるよ』、想像以上
に似合つてるなら『可愛いよ』、春樹つちの中で最高クラスなら『
萌えるよ』かなっ」

「なるほど～参考になるよ、リンちゃん」

「涼たんも分かつた？ ……つてあれ？」

「……はつ。少し意識が飛んでました」

「え～、つて事は今の話聞いてない？」

「あ、いえ。何故だか話の内容は覚えてます」

「そうかっ、じゃあ、安心だねつ」

その後も衣装の取替えは続いた・・・・・

（ダイジェスト終了）

「よし、準備完了つと」

あの後。

部屋の片付けをして、試合のスタメン案に目を通した。

その後で準備に取り掛かり、今準備完了した。

「あの～、春先輩。これ何ですか？」

「ん？ 分からないか？ バットとグローブだけど」

「…………何でそんな物を用意してるんですか？」

「え？ う～ん、そうだ！ 涼、お前今日時間あるか？」

「え、あ、はい。今日は特に予定は無かつたですよ」

「じゃあさ、これからオレ達が行くところについて来るか？」 それ

が一番手っ取り早い。

「え？ 別に良いんですけど、どこに行くんですか？」

「球場だよ、野球するんだから当然だろ？」

「え、それってd」 ガララーッ。

どうやら懐かしいヤツが登場のようだな。

「ん？ どうした春樹。生靈を見たかのような表情をして」

「……いや、夕方も会った筈なのにかなり懐かしく感じただけだ」

不思議な事もあるもんだね。

「そうか、おつとそれよりももう少し時間だらう？ 出発しなくてもいいのか」

「あ、もつ出るナビ。氷河を呼んでこな「もつ出る」……早

いな

突然出てくるな、氷河。ビックリするだらうが。

「さて、涼も行くよな？」

「え、はい、モチロン」 何か聞きたそつだったが、それ以上何も言わなかつた。

「よし、全員居るし行くぞ」

そつと音つてオレ等は家を飛び出した。

Request:1 一階の惨状（後書き）

どうやら今僕は滅多に無い忙しさの真っ只中にいるようです
水曜から金曜にかけても用事があるし、来週も行事が・・・
だからそれが終わるまでは更新遅くてもご勘弁を！！
最低来週の木曜日まで更新出来ないかも知れませんが、どうか暖かい目で見守つてください・・
本当に、本当に来週からは頑張るから！！

嘘じゃないから！！
・・・・初期の更新速度に戻りたい
戻れるように努力はしています
ではまたノシ

Request: 1 田端の策略（前書き）

今日は田端さん視点からのスタートです
でまあいいや・・・

Request：1 田端の策略

（田端 side）

成沢が帰った後、部室で着替えていた。

「キャプテン、これからお好み焼きとかどうですか？」残っていた数人が声をかけてきた。

・・・・少し考えて、ある考えが脳をよぎりそれを断る。

「そうですか、じゃあ俺らだけでこきまわ」と言つてゾロゾロと歩いて言つた。

それを見送った後、俺はグラウンドの横へと向かった。

「やつぱりここに座たか、平井」そこには予測通り平井が座っていた。

「あ、キャプテン。ちやーッス」少し元気が無いように見えるが、あえてそれには突つ込まずに隣に座る。

「どうした？お前は焼肉行かないのか？」さつき声をかけてきた奴らは平井と仲が良い連中だ。

「え？ああ、いや、今日は行きたくねーんスよ」やはりいつもテンションショトンが無い。

まあ、原因は明白だが。

当然、「アイツ等に負けたのがそんなに悔しいのか？」そう聞いた瞬間、

ビクッ！と体が反応した。分かりやすい奴だ。

成沢風に言わせてもらえれば、自分に正直で素直だと言う事だらう。

「そ、そんな訳ねーっスよ。別にあんなの偶然ッス。次は勝てるッスよ」

・・・・・セリフ面はやる氣に満ち溢れているようだが、言い方

とインストネーションが情けない。

「はあ、お前は・・・」言いかけて止めた。どうせなりもつと効果的に言つた方が良いと思ったからだ。

「そりだ、お前腹減つて無いか?」

「え? イヤ、別に大丈♂「奢つてやるから行こ!」 ・・・了解ツス」多少強引だが店に行く事にした。

まあ、これで当初の予定通りだ。

「じゃあ、早速行こうぜ。平井、早く着替えて来い」

田の前では肉が焼けている。

「どうした? 食わないのか? 別に奢りだからつて遠慮する事無いんだぞ」さつきから箸に手をつけようとしない。

「・・・食べるツスよ」やつと箸に手をつけた。

「で、何でお前はそんなに落ち込んでるんだ?」

「別に落ち込んでなんかいねーツスよ」・・・どう見ても落ち込んでいるけどな。

「まあ、それなら良いけど何が気に食わないんだ」負けたのが悔しいのは分かるが、そんなに落ち込むほどの事では無いはずだ。

「だから、別に何でも無いツス」

ハア、これは大分骨が折れそうだ。

「そりか、まあ食え」とりあえず今は飯を食おつ。

しばらく飯を食べ続けた。

もう一人とも腹いっぱいになり時間もかなり経つた。

「なあ、お前が気に食わないのはアイツ等がふざけてると思つてゐからだろ?」

急に切り出してみたが、図星だったようだ。

「な、何を。そ、んな訳無いッス」 そうは言つても田が泳いでるけどな。

「隠す必要は無い。去年の俺もそうだったからな。お前は成沢達が何の努力もせずに威張つて、勝つたから嫌な気分なんだろ?」

「そつツスけど・・・キヤブテンもそうだったんスか?」

「ああ。でもな・・・」 直接見た方が話が早い。・・・時間もちょっと良いしな。

「じゃ、行くぞ」 荷物を持つて立ち上がる。

「え? 何処にいくんスか?」

「良いから黙つてついて来い」

そのまま一人で店を出た。

（春樹 side）

球場に着いた。

「良し、着いたな。お前等準備しろ」 後ろを向いて全員に言つ。・・・

・・・あれ?

「花凜は? 何処に行つたんだアイツ?」

「川柳は帰つた」

「は? アイツが帰る訳ないだろ」 運動大好きの花凜なのにそれは無いはずだ。

「あのな? 成沢、この世には触れてはいけない話題つてのがあるん

だ

触れてはいけない話題・・・・?

「・・・その顔は納得してないな」

「え? イヤ別にそんな事は無いぞ?」 声が裏返つた・・・。

「仕方ない、教えてやる。」

最近川柳は暴走しすぎていたから作者が出場禁止を出した

・・・・ん?

何か意味が分からない事を言られた気がする。

「最近暴走しすぎだから? 出場禁止?」 ・・・ 分からん。

「そうだ。ここ最近は特に欲望をせらけ出していたからな。作者がこれはマズイと思つたんだろう」

・・・・ 分からない。全ぐ。

・・・ま、良いか。

「ちなみにこの回と次の回は出られないからな

・・・さいですか。もつどうでも良い。

「じゃ、準備するか」

何か変な予感を抱きながら、俺達は準備を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277m/>

SSC ~ School Support Club ~

2010年11月27日10時29分発行